

About the Murder of the Circus Queen
1932
by Anthony Abbot

目次

サーカス・クイーン
の死

5

訳者あとがき 270

解説 横井 司 274

主要登場人物

- サッチャー・コルト……………ニューヨーク市警察本部長
アンソニー（トニー）・アボット……………コルトの秘書、本書の語り手
マール・ドアティ……………地区検事長、コルトの旧友
ジョシー・ラトゥール……………サーカス団の花形スター
フランドリン……………ジョシーの夫、サーカス団のアクロバット
ロビンソン大佐……………サーカス団長
セバスチャン……………サーカス団メンバー
ケブリア……………ウバンギ族の呪術師
イザベル・チャント……………ジョシーづきのメイド
マールブルク・ラヴェル……………銀行家、サーカス団のスポンサー
グミンダー教授……………アフリカ系言語の専門家
ルックナー教授……………コルトに協力する老科学者
マルトウーラー医師……………次席検死官

サーカス・クイーン
の死

前書き

古典的なニューヨークの殺人劇

ニューヨーク市警本部長だったサッチャー・コルト氏が在職中に捜査した犯罪のうち、最も奇怪なものを挙げると言われれば、数年前のサーカス公演の初日に起きた奇妙な殺人事件を躊躇なく選ぶだろう。それはコルトが捜査した最も奇怪な事件だっただけでなく、最も魅惑的かつ邪悪な事件でもあった。この事件では、昔の探偵の金言が二重の正当性を与えられたのである。警察署ではこう言われている。「犯罪を理解するにはその背景を知らなければならない」しかし、入念に計算されたこの殺人事件において、理解すべき背景は二つあり、一般市民や警官たちが知らない世界も二つあった——知られることのない、未知の奇妙な領域。そのため、コルトが経験した他のどの犯罪にもなかった執拗な謎が、マディソン・スクエア・ガーデンで発生したこの古典的犯罪には存在していたのである。

新旧二つのマディソン・スクエア・ガーデンがあり、それぞれで殺人が行なわれた。だが、両者のあいだには二十五年あまりの歲月しか横たわっていない。両者の差異が大きいために、殺人事件の研究者にとって第一の犯行は些細なものに、第二の犯行は極めて興味深いものとなった。マディソン・アヴェニューと二十六番街の角に立つ古い建物の屋上で発生したスタンフォード・ホワイトの射殺事件は、軽率かつ乱雑な犯行であり、好事家にとっては一瞥するだけの価値しかなかった。

一方、八番街ウエストに接し、四十九番通りと五十番通りに挟まれた新しいマディソン・スクエア・ガーデンで起きた殺人は、それと別種の犯行、真に入念な殺人、そして極めて危険な犯罪者による事件だった。一見したところ感情に左右されず、危険なまでの完全性という点で機械のような頭脳

を持つこの人物は、入念に計画したうえで比類なきまでに巧みな罠を仕掛けた。血に飢えた行動の一つ一つが、何気ない偶然、無邪気な誠実さで覆い隠されたのである。すべてが隅々まで入念に計画されていたので、何一つ計画されたようには見えなかった。振り返ってみれば、犯行手段が突き止められたことも、犯人が名指しされたことも驚きのように思える。この謎に満ちた事件がかくも短期間で解決に至ったのは、ひとえにサッチャー・コルト本部長の忍耐、勤勉、そして粘り強さの賜物である。彼が犯行現場に居合わせた事実こそ、悪魔的な犯行を狂わせたのだ。

しかし、人間による悪事のスペシャリストであるコルトにしても、最後に突き止めた独特かつ冷血な動機への準備はできていなかった。科学万能の時代において、時代遅れの殺人犯はずっと以前に、近代のかつ難解な技術を有する犯罪者に道を譲っていた。だが、サッチャー・コルトがそれまで耳にした殺人犯の誰一人として、現実的な利己心、あるいは計画を実行に移す技能と勇氣において、この怪物を超える者はいなかった。

私は事実を装飾することなく提示しようと試みた。この事件で我々とともに働いた人間の中には、夜ベッドに入ることを恐れる者もいる——暗黒時代の黒魔術師が権力と闘っているかのようなあの数時間を思い出し、いまだ身体を震わせる筋金入りの警察官がいるのだ。これからご覧になるように、我々は一晩にわたって恐怖を存分に味わったのである。

アンソニー・アボット

第一章 奇妙な予感

十三日の金曜日。

先ほどからずっと、四月の雨が本部長オフィスの窓を叩きつけている。ニューヨーク市警の古い本部庁舎はセンター・ストリートに建っていて、本部長オフィスがある二〇〇号室は二階の北端に位置している。そしていま、暗い色合いをした板張りの室内は、春の土砂降りによって早くも薄暮に包まれていた。緑のかさをつけたランプが、机上に白い光の輪を作る。サッチャー・コルト本部長は背を丸めながら、市長に提出する年次報告書の校正刷りに集中していた。

三時三十分ごろ、ドアをノックする音が聞こえた。本部長オフィスを担当するイスラエル・ヘンリー警部——現在は警視正——が姿を見せ、金文字が浮き彫りになった名刺をわたしに手渡す。そこにはこう記されていた。

「カーネル・トッド・ロビンソン。『ロビンソン・ブラザーズ・アンド・ドーソン・アンド・ウッドラフ合同サーカス団——地上最大のショー』オーナー兼団長」

その仰々しい名刺をサッチャー・コルトの前に置くと、暗く陰気な瞳に喜びの光が走った。

「トッド・ロビンソン！ 今夜、マデイソン・スクエア・ガーデンでショーの初日なんだ。すぐにお通ししろ！」

そして、出し抜けにくくす笑いながら、本部長は校正刷りを脇によけた。コルトのサーカス好きは、もちろんわたしも知っている。「パトロール警官友愛組合」一座は別格として、お気に入りには「サーカス・ファンズ」。ホテル・ルーズベルトのダイニングルームを借り切って行なわれるニューヨーク支部の月例昼食会にも、都合が合えば必ず出かける。テント状に仕立てられたそのダイニングルームはポスターや飾り、それにつまらない美術品で埋め尽くされ、床には芝生が敷かれる一方、テーブルは紅白のチェック柄のリネンで覆われており、ダイニング・テントを思い出させるようになっていた。

本部長が嬉しげな笑みを浮かべていると、八角形の応接室に続くドアから、かの有名なサーカス団長が姿を見せた。背が高く、程よく日焼けした顔に銀髪という外見のトッド・ロビンソン大佐は、なめし皮の色をした退役軍人といった表現がふさわしく、洪水や火事、泥やぬかるみ、パニック、強風による倒木、そして高価な動物の死など、普通なら「神の行ない」と呼ばれるような、ありとあらゆる厄災にも平気だった。象の調教から照明機材の修理まで、「シヨ一のなか」ならなんでもできるこのサーカス団長は、顔一面に笑みを浮かべてコルトと握手し、机の端に腰を下ろしてから、噛み煙草を噛み切った。

「チーフ、どうも参ったよ。助けてほしい」

コルトは特製の煙草をアルジェリア製のパイプにぎっしり詰め込んだ。

「よろこんで、大佐。で、どういうことです」

「聞いてくれるか」

「ええ、どうぞ」

ロビンソン大佐はまず、マディソン・スクエア・ガーデンで興行を行なう経緯を話した。その年、「リングリング・ブラザーズ・アンド・バーナム・アンド・ベイリー」一座はヨーロッパを旅していた。呼び物となるシヨーがない状況は、大手の独立系サーカス団で最後尾にあったロビンソン大佐の目に、またとないチャンスと映った。そこで新しい動物を買って調教し、豪華な金箔塗りのワゴン、それに新しい制服とコスチュームを購入して、大規模シヨーの契約にこぎ着けたのである。

「だが、コルトさん」サーカス団長は話を続けた。「ここからおかしな出来事が次々と起こり始めたんだ」

「なんです、おかしな出来事とは」

「いや、わたしのささやかな西部劇で奇妙な不正が行なわれている、と言うべきか」ロビンソンは訂正した。「単なる偶然ではない出来事だ。思うに、むしろ警察の問題じゃないかと思う。最初は悪い偶然が重なっているだけだと考えた。シヨーが始まってもないのに南部で事故が三件起きて、三人死んだ。だが、それで終わらなかつた。冬の拠点としていたジョージアを離れるとすぐ、また別の事件が起こりだした。まずはリッチモンドで列車事故に遭い、山車がしが二台、ばらばらに壊れてしまった。次に、観覧席を積んだ平底船が炎上した。象たちも病気に襲われる。雄の象のうち三頭を除いた全部が、奇妙な病気にかかったんだよ。そしてワシントンからニューヨークに向かう五時間のあいだに、我々が誇る「スピットファイア」というライオンが、消化不良で死んでしまった。だが、それでもまだ足りないのか、ペンシルベニア駅に着いてすぐ、これも貴重な見せ物だった、調教済みのラバが檻から出る途中に脚を折ってしまい、銃で安楽死させざるを得なくなった。言っておくが、いま言った事故はどれも、我々にとって大きな損失だ」

しかし、コルトはわずかに表情を変えたに過ぎなかった。

「これらの不運が悪意によるものとは考えていないでしょうね」

トッド・ロビンソン大佐は節くれだった手で銀髪をとかすと、苦惱の光を両眼に浮かべた。

「実は、それだけじゃない」と、言い訳がましく続ける。「それからあの出来事を聞いてほしい。わたしのスターたちに脅迫状が届いたんだ」

「脅迫状？」

「そこには、ニューヨーク公演では自慢のパフォーマンスをするなど書かれていた。逆らうなら命はない、と！」

サッチャー・コルトの整った顔に浮かぶ、憂慮の色が消えた。再び椅子にもたれ、リラックスした穏やかな表情でつぶやく。

「で、あなたは新聞記者にこう言うのでしょうか、スターたちは恐るべき脅迫を受けたが、何があるかと必ず姿を見せる——」

「皮肉はよしてくれよ、チーフ——広報係のでっち上げなんかじゃ——」
それを遮るようにコルトが尋ねる。

「で、脅迫されたスターたちの名は」

ロビンソンがそれらの名前をたちどころに暗唱したので、わたしはそれを書き留めた。

「若いブランコ乗りのフランドリンと、その妻ラトウール——」

「あのジョシー・ラトウールか」

「そう。身びいきで言うのじゃなく、彼女はサーカス界最高のパフォーマーであり——そのギャラは

サーカス史上最高額だ」

「他には」

「シニョール・セバスチャン、『空中の王様』と呼ばれている——まあ、これもそのとおりだ。そして綱渡りの一人、ムリヨ。脅迫状が届いたのはそれだけだと思う」

そう言って大柄な興行主は立ち上がり、しばらく躊躇してからおずおずと付け加えた。

「いやなことが他にもあつてね。今日は十三日の金曜日——わたしのパフォーマーたちは誰も出演したくないと言うんだ。わたしだってこんな日にショーを行なうなどまっぴらごめんだが、仕方がない。わたしのスポンサー——マールブルク・ラヴェルという百万長者はご存知でしょうな——そのラヴェル氏が、公演開始の遅れに苛立っているんだ。我々の必要経費は一日あたり一万五千ドル。すでに巨大な損失が出ていて、ラヴェル氏としてはすっかり腹を立て、もう金を出さないと脅している。なので今日がどんな日であれ、ショーを中止するわけにはいかない。もちろん」そこで口調がいささかむきになる。「我々のショーは巨額の金を生み出す。いつだって、すぐれたパフォーマンスを見せるからだ——あの奇妙な事故さえなければ、だが」

そう言って絹のハンカチで鼻をかみ、人なつっこい笑みを浮かべた。

「この商売はいやなことばかりだね。こんなのは日常茶飯事といつていい。ですがね、チーフ——人が突然三人も死ぬなんて！ 自然死だったとはいまでも思えない——あの脅迫状がなかったとしても、どうしてこんなことに巻き込まれたのか、まったく見当がつかない。わたしはしばらく前に相当の金を相続したので、いつ引退してもいい。ギャングや詐欺師とは関係を絶つたし、いまはまったくのファミリービジネスだ。しかし、正直に生きた結果わたしはどうなったか。苦悩の種が増えただけだ！

〔著者〕

アンソニー・アボット

本名チャールズ・フルトン・アワスラー。1893年、アメリカ、メリーランド州ボルチモア生まれ。法律を学んだのち、リポーターの仕事や様々な雑誌の編集をしながら執筆活動を始めた。敬虔なバプティストの家庭に育ち、宗教関係の著作が多数ある。1949年に刊行されたイエス・キリストの伝記『偉大なる生涯～たぐひなき物語～』はベストセラーとなり、200万部以上売れた。1952年死去。

〔訳者〕

熊木信太郎（くまき・しんたろう）

北海道大学経済学部卒業。都市銀行、出版社勤務を経て、現在は翻訳者。出版業にも従事している。

サーカス・クイーン^しの死

——論創海外ミステリ 242

2019年9月20日 初版第1刷印刷

2019年9月30日 初版第1刷発行

著者 アンソニー・アボット

訳者 熊木信太郎

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル
TEL:03-3264-5254 FAX:03-3264-5232 振替口座 00160-1-155266
WEB: <http://www.ronso.co.jp>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1869-6

落丁・乱丁本はお取り替えいたします